

前1千年紀の庶民社会と採石場

—エジプト・アコリス遺跡の調査研究 2021—

辻村 純代 公財)古代学協会客員研究員
 川西 宏幸 筑波大学名誉教授
 花坂 哲 東京都立大学客員研究員

Non-elite Society and Quarries during the First Millennium BC: Akoris Archaeological Project 2021

TSUJIMURA, Sumiyo Visiting researcher, The Paleological Association of Japan, Inc.
 KAWANISHI, Hiroyuki Professor Emeritus, Tsukuba University
 HANASAKA, Tetsu Visiting researcher, Tokyo Metropolitan University

1. はじめに

2021年度は新型コロナウイルスの流行により現地での発掘調査は断念せざるを得なかったため、アコリス遺跡に関連する論文を“*Akoris Report 2020*”として今年度出版した。それぞれの研究成果を紹介すると共に、現地に保管されている出土ミイラ2体についてX線撮影とCT-scanningを実施したので、その成果を報告する。

2. ソベク信仰(図1)

中エジプトに位置するアコリス遺跡はナイル川東岸を南北に連なる河岸段丘上に形成された小規模な都市遺跡である。約15haの都市域の中央西側には一際高い岩山が聳え立ち、その麓には7基の岩窟神殿が並ぶ。最も東に造られたチャペルAはローマ帝世紀の諸皇帝により多柱室とその北に2つの中庭と2つの門を備えた全長100mに及ぶ神域を有する神殿へと整備された。神殿域から出土した奉献碑は第3中間期からローマ時代のものを含めて総計20基前後になり、多くはソベク/スーコス神とアムン神に捧げられている。ソベク/スーコスはワニの頭を持つ神で、奉献碑の他にチャペルBの入り口に末期王朝~プトレマイオス時代に書かれたナイル賛歌のなかにソベクの形容句が記され、またチャペルの周辺では神殿に奉納されたと思われる大小のワニのミイラ片が数多くみつまっている。

ソベク神は中王国時代から国家神アムンとの同一化が進むいっぽうで、ワニは雨期になると多くの卵を産

むことから豊穡を約束する神であると同時に、河畔に住む人々に危害を加える怖い存在でもあった。末期王朝時代に始まる熱狂的ともいえる動物崇拜を研究テーマとする清水麻里奈はアコリスにみるソベク信仰に注目し、同じくソベク信仰の中心地の一つであるファイユーム地方との比較を試みている。ファイユーム地方の神殿とアコリスのチャペルAに共通してみられるのはワニのミイラ収納用の壁龕と祭壇で、両者における壁龕構造の違いを明らかにした上でチャペルAの壁龕の大きさから収納されたのは雌のワニであったと推定し、両地域のソベク信仰はローマ帝政期に最高潮に達するという。また、アコリスでは岩山の反対側に航行の安全を願う船員たちの守護神として崇敬を集めたローマの双子神デオスクロイとその姉妹神ヘレナの像を刻んだ磨崖碑があり、これとソベク神との文化融合についても論究している。

3. ハルポクラテス信仰

ギリシア・ローマ文化とエジプトの伝統的文化との文化融合はアコリス北端のワディ出土のイシス、ベス、ホルス等を含む型作りのテラコッタ群にもみることができる。李 昊天は末期王朝時代にアレクサンドリアの70kmほど南にギリシアとの交易拠点として前7世紀に建設されたナウクラテス出土のテラコッタを取り上げてギリシア文化とエジプトの伝統的文化について論じている。取り上げたのは男根型の石製品と男根を強調した土製品で、後者はホルスの新たな表現として作られるようになる“子供のホルス(ハルポクラテス)”で、剃った頭に一部だけ残した髪を垂らし、人

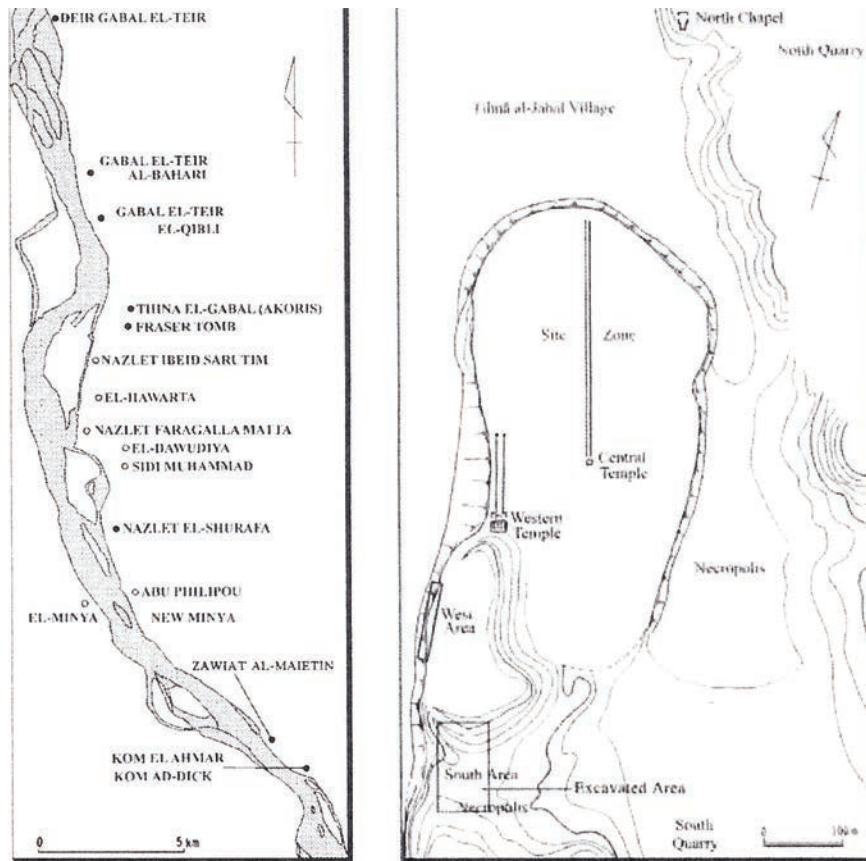


図1 アコリス遺跡とその周辺

差し指を銜える独特の容姿と仕草で知られ、ギリシア・ローマ時代を通じて人気の神である。なかでも1対のワニを踏みつけて両手でサソリや羚羊、サルなどを掴んでいる小型土製品はシーパス(Cippus)と呼ばれ、子供たちを危険から守る護符として広く知られる。いっぽう、男根を強調したハルポクラテスは豊穡を祈願する対象でもあり、そのためにナイルの氾濫を祝う祭りにはハルポクラテスの男根像をもった行列が町を練り歩き、あるいはハルポクラテスだけでなく、女性器を露わにした女性像も盛んに作られた。これらの土製品はナウクラテスの公式神殿祭祀とは別系統で、ナウクラテスに住むエジプト人民衆の信仰を示している。護符、あるいは厄除けとされるハルポクラテスの土製品にはロードス島で作られていた“Temple boy”と同じく片面鑄型作りのものがあり、その場合、男性性器は別に取り付けられている。このようにギリシア型の鑄型を用いた土製品はナウクラテスでのみ発見されるが、使われる土はナイルシルトである。それまでメンフィスやサッカラで作られナウクラテスに持ち込まれていた性的表現を伴う石製品は前6世紀の間に急速に減少し、土製品が圧倒するのは鑄型作りが普及したためと考えられる。鑄型を用いて大量に作られた土製

品は低価格でもあり、厄除けとしてのナウクラテス産のハルポクラテス像がエジプト各地に販路を広げていった経緯を宗教観と技術の両面から詳述している。

4. 石切り場(図2)

アコリスの北端を巡るワディの一角では型作りのテラコッタ人形の他に織機用のドーナツツ型錘やアンフォラがまとまって出土している。アンフォラの把手に推されたスタンプにより、そのほとんどがロードス産で、紀元前2世紀に集中していることが岡藤芳幸によって明らかにされている。この地区の調査のきっかけとなったのはプトレマイオス朝時代に加工途中で大きな亀裂が入ったために放置された巨大な円柱の存在であった。その形状から石切り場からの搬入方法やここでの加工方法が検討され、今日に続く石切り技術に関する調査研究の出発点となった。アコリス周辺の石切り場が堀 賀喜を中心とする九州大学の建築チームによって調査が進むなか、ドイツのクレム夫妻によって報告されたニューメニアの大規模な採石場に残るファラオ立像が素描された巨大ブロックを対象とする西本真一と遠藤孝治の調査が始まる。そこから40m離れた場所からは切り出し作業の途中段階で放棄され



図2 ニューメニアの石切り場

たオベリスクが新たに発見され、安岡義文を加えて巨石の設計法や切り出し方法についての検討がなされている。

これら巨石像の石切り場から南に少し行くと、約1 kmに亘って続く谷状地形となる。谷の両側に形成された採石用のギャラリー群の多さと複雑さによって圧巻の眺めが展開するのだが、さらに驚くべきはギャラリー内にエジプトの民衆文字(デモティーク)とギリシア文字を併用した多くのグラフィティが残されていたことである。デモティークは内田杉彦、ギリシア語は周藤と高橋亮介がそれぞれ担当し、石材の切り出し方法の解明には九州大学の建築班が当たった。調査の結果、この石切り場の操業期間がプトレマイオスⅡ世とⅢ世の治世下、すなわち紀元前3世紀後半であり、ここでの活動がナイルの氾濫期すなわち農閑期である夏に集中していたことも判明した。

保存の良いギャラリーの一つ(セクションN)を対象として石材切り出しの工程復元に2つの異なるアプローチが小川拓郎と周藤によって試みられ、今回その結果が報告された。小川はギャラリー内部に残る割れ目に着目し、それらが直線状と非直線状に走る2種に分類される理由について地質学的知見に基づく詳細な観察と3D実測データを用いて分析した結果、前者が石切り作業の痕跡であるのに対して後者は自然の割れ目、すなわち石目であるとの結論を得た。いっぽう、周藤は複数のグラフィティに記された日付と労働量から作業の中断期間があることを認め、他のギャラリーにおいても同様の中断期間を確認している。両者が共通して得た結論は石材の切り出し作業に取り掛かる前に石目の有無についての調査が行われたということである。周藤によれば事前の調査を行うグループと切り出し作業に従事するグループとがあり、それらの作業

工程の間に中断期間が設けられたのは石を乾燥させる必要があったからだとみている。

5. 第3中間期の墓地

ラムセス朝後半に形成された小都市アコリスの発掘は遺跡南西部に聳える岩山の南側、すなわち先に述べた岩窟神殿群の反対側で進められている(南区)。岩山中腹の斜面から平坦部を経て、さらに南の段丘斜面へと続く調査区には住居や円形貯蔵庫が密集し、中には皮革工房など注目すべき生産遺構が見つまっている。しかし、第3中間期の早い段階で居住地としては廃棄されて急速に墓地化する。

墓のほとんどは個人用のピット墓で、棺種や副葬品なども庶民らしい簡素さである。しかし、新王国時代のアマルナやカウの庶民墓に比してここでの木棺使用率は同じ第3中間期のマトマールと共に圧倒的に高い。和田浩一郎はこの理由について棺の役割の変化と社会の変化という2つの理由を挙げている。エリート層においてはそれまで墓がもっていた機能が棺に集約されていくため棺には死者の復活を保証する様々な神や銘文が書かれるようになるが、そうした宗教的知識の乏しい庶民にとっては木棺であること自体が重要だったという。成人のほとんどが人形木棺と方形木棺を用いているのに対して、子供の埋葬方法は多様で、周産期の子供に用いられる甕棺の他にバスケット、マット、方形籠、ヤシの中肋やタマリスクの枝を巻き付けたもの、小型の木棺などがある。10代前半の少女がサイズの合わない成人用の人形木棺に埋置されている例は当時、その年齢になれば大人の女性として扱われていたという文献史料を裏付ける1例である。花坂 哲によって調査された皮革工房の製品であろう履物は成人墓だけでなく子供の墓にも副えられており、副葬品についても成人墓と遜色がなくないばかりか、最も多くの副葬品を有していたのが7~8歳の子供であるから成人を凌ぐと言ってもよい。

6. 出土ミイラ(図3)

今年度、X線撮影とCT-scanningを実施した2体は2017年度に初めて撮影を行った成人女性ミイラの近くに埋葬された子供のミイラである。3D化による解析が終わっていないので詳細を明らかにすることはできないけれども、被葬者の年齢はそれぞれ4歳前後と7歳前後と推定され、前者には側弯症と栄養不足を示すハリス線が脛骨に認められる。脳や内臓の摘出は

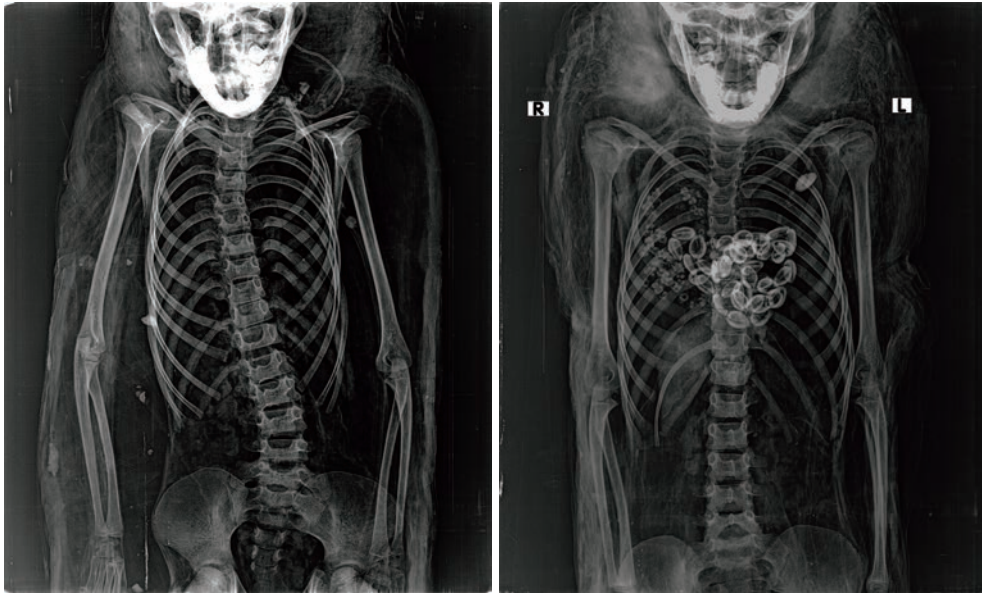


図3 子供のミイラ2体(Grave 3とGrave 4)

女性ミイラと同じく、子ども達にも行われなかったようだ。成人女性は腕にスカラベ1個のほかには頭部に置かれた護符のようなものが確認されるに止まったが、2体の子供のうち年少の子供にはネックレスが首に巻かれ、その近くにはワジェットがみえる。また、年長の子供の胸にはタカラガイの一種であるハナビラタカラが20個は下らないであろう数の集積としてビーズと共に置かれている。タカラガイは古くから装飾品の一つとして用いられ、アコリスでも決して珍しいものではないけれど、副葬品に限ってみるとこれを含めてわずか3例しかない。うち2例は各1個ずつなので本例は破格の多さといえる。このハナビラダカラはエジプト周辺では紅海にしか生息していないので、アコリスに直接持ち込まれたのか、あるいは他の都市が介在していたのかは不明としても東の砂漠を通して持ち込まれた可能性は大きい。

南区からはフェニキア産アンフォラ、ギリシア産フラスコ、キプロス産ケルノス・リング(中環状容器)といった東地中海の土器が出土しており、小都市ながら

もアコリスが遠隔地交易の末端に連なっていたことがわかる。砂漠の岩塩などもそうであるけれど、ハナビラダカラが東砂漠の遊牧民との交易を示すとすれば近隣の都市との関係だけでなく、より広範な地域を見据えた都市の実態解明が求められるように思う。

なお、子供ミイラ2体のX線及びCT-scanningについては、公財)高梨学術奨励基金特定研究助成『エジプト・アコリス遺跡出土ミイラの考古学的研究』によって実施したものであることを明記する。

■参考文献

- ・ The Paleological Association of Japan, INC. 1995. Akoris 1981-1992. Kyoto.
- ・ Kawanishi, H. and S. Tsujimura (eds.) Preliminary Report Akoris 1997 (Tsukuba University 1998) - Preliminary Report Akoris 2015 (Tsukuba University 2016).
- ・ Kawanishi, H., S. Tsujimura, and T. Hanasaka (eds) Preliminary Report Akoris 2016 (Nagoya University 2017) - Preliminary Report Akoris 2021 (Nagoya University 2022).
- ・ 和田浩一郎編 2021「アコリス遺跡が解き明かす古代エジプトの世界」『文化遺産の世界』Vol.39